

特別寄稿

足もとからのおもてなし

～歌舞伎座の大間を飾る山形緞通～

オリエンタルカーペット株式会社
代表取締役社長 渡辺 博明



艶やかな「朱」に染められた歌舞伎座の大間は、来場者を祝祭空間へと誘う入り口。朱塗りの丸柱、座紋の鳳凰が記された提灯一。なかでも床に敷かれた緞通がその祝祭性を特徴づける。—清水建設『匠の技』—より

平成25年4月2日早朝、新しい歌舞伎座での「こけら落とし」公演を見ようと、生憎の雨にも拘わらず、大変たくさんの方が並ばれている姿をニュースで見っていました。私自身3月27日の「開場式」にご招待を頂き、一足先に拝見しておりま

したが、いよいよ私どもの絨毯が皆さんに見て、そして踏んで頂けることへの喜びで一杯でした。

日本文化の殿堂である「歌舞伎座」は、明治22年の第1期の建物から数えて、今回が第5期の立て替えとなりました。絨毯自体は、私どもが昭和29年にお納めしていたものと同じ、京都の平等院鳳凰堂内部に描かれた昨鳥文様をモチーフとしたものを、この度の建物にあわせ蘇らせました。即ち1千年前のデザインを平成の建物に生かしたわけです。

この絨毯の特徴は、昨鳥柄であることは勿論ですが、その他の大きい面積の地色である「朱」の色にもあります。当然こうした時代ですから仕事には競争がつきもので、歌舞伎座の絨毯づくりも例外ではありませんでした。後日建築家の方に、当社が受注出来た大きな要因として、この「朱」色の染める技術があったと聞いております。これは、私どもの山形緞通が産地形成につながる「文



化の伝播’ としてではなく、昭和10年に山辺町に7名の中国人技術者を招聘し始めたということで、全ての工程を自分たちでやらざるを得なかったという、つまり日本で唯一、一貫管理で絨毯づくりをしているからこそ出来たことだと自負しております。自社染色を行っている会社は、私どもしかありません。歌舞伎座メインロビー「大間」の絨毯は、地色の「朱」色も含め22色の色を使っておりますが、「朱」色については15色など、100色程の色を染めた中から選ばれた色が使われています。

この歌舞伎座では、来場者を出迎える「大間」を始め、貴賓室や階段廻り等、2500平方メートル分の絨毯を担当させて頂きました。特に「大間」の絨毯は、昨鳥文様の大きさが縦5メートル・横9メートル、全体では縦11メートル・横26メートルの大変大きなものです。熟練した職人が、フックガンと呼ばれる特殊工具を使って毛糸を綿